

羽出浦の歴史と民俗(六)

安部 弥右衛門

2 寺子屋

羽出浦 天保四年生まれの祖母は、福聚庵の慈船和尚から

読み・書き・珠算を習った。読みの教科書には、『商売往来』

・『町尽し』を使った。『町尽し』は、内町・本町・鉄砲町

・古市町・中島町・船頭町など、佐伯の町名が主に記してあ

った。珠算は加減乗除で、暗算・煙草算などもあった。煙草

算は一斤(一六〇匁)がいくらと値段を決め、端数売買に応

用して便利であったという。安政五年生まれの父も、福聚庵

の和尚に習ったそうである。父の同年代の子供達は、揃いも

揃って暴れん坊で、授業を受けているよりも、山や畑を駆け

回ってくもを捕え、野鳥の卵や雛を探すほど、和尚の手に負

えぬ者が多く、文字をよくする人は稀であった。文久二年生

まれの母は、カイコウさんに習ったということであったが、

カイコウの意味が長いこと不明であった。近年、旧庄屋文書

を調べて、開闢あるいは皆合と書き、庄屋の書き役であることを知った。当時の皆合は天満社の堂守であった。母が福聚庵に行かず、皆合さんの塾に通った理由は分らないが、野育ちの寺子との共学を避けたのかも知れない。女兒は『女大学』を習ったということであったが、祖母と母の何れから聞いたのか、記憶が定かでない。また、幼少の時に『塵劫記』という本が、家であったことを記憶している。『塵劫記』は寛永四年(一六二七)に初版が発行され、江戸時代を通じて数学の入門書であった。明治十一年三月、『明治小学塵劫記』が発行され、算術の教科書として使われた。

大正十昭和初期に、学校行事などで、村の有志が学校に集まった機会に、昔の寺子屋が話題になっていた。その際に必ず話に出たのが慈船和尚である。この人は薩摩藩士であったが、故あって佐伯潮谷寺の相替上人を頼って仏弟子となり、天保一三年一月二五日に福聚庵主となった。明治一二年六月八日に庵で死亡した。過去帖によれば行年六四才である。慈は庵の入り口の左側に、魚鱗塔と並んで立っている。潮谷寺の過去帖は、慈船を慈般と記してある。しかし、福聚庵の墓碑には中興誓蓮社弘誓慈船和尚とあり、過去帖も慈船と記

してある。また、古老達も慈船和尚と言っていたので、慈船が正しいと思う。この和尚の庵主期間は四〇年に近い。百姓や漁師に学問は要らぬという時代に、寺子屋教育を行って、指導者層の育成に尽くした和尚の功績は、大きいものがあるというべきであろう。

中越浦 西生庵入り口右側の、大銀杏の根元に精華上人の墓がある。精華上人は浦代（米水津村）の生まれで、養福寺の弟子となった。庵主として入山したのは弘化二年四月で、明治一三年九月末日に亡くなった。行年は不明である。庵主となると直に寺子屋を開き、寺子を教育した期間が長かったので、教えを受けた寺子は多数に上ると思われる。晩年の寺子としては、明治時代に中越浦の指導層であった、中鶴佐四郎・浜田伊太郎・加嶋林太郎・中村藤四郎・加島秀五郎・安倍弥平・亀井喜三郎・亀井休蔵・磯村与五郎など、が記憶されている。精華上人の跡を継いだ中村了道和尚が、精華上人の寺子屋に、恩師の墓の建立を説き、安倍弥平・磯村与五郎両氏が、世話人となって建立したという。墓の台石に「當浦手習子中 世話人安部磯村」とあるが、安部は安倍の間違ひであろう。中越浦の寺子屋については、前区長亀井喜三郎・

西生庵主亀田芳照両氏のご教示をえた。

猿戸 幕末の頃、肥後国八代藩家中の婦人が、子供二人を連れて猿戸に移住して来た。母は他に再縁したが、兄弟は浦に残って漁業に従事した。兄の古田禎一は能書家で、家業の傍、猿戸の神社で広浦・猿戸・島江の子供達に、読み・書きを教えた。古田師匠が、寺子屋で教えるために文字を記した板は、最近まで旧家山崎大蔵氏宅の壁板に、打ちつけてあったという。なお、古田家では師匠の没後、秘蔵の鎧と太刀を、柏江の岩田家に預けてあることを知り、返還方を懇請して太刀は返されたが、鎧はそのままになったという。

広畑 西南戦争後、政府の追求を逃れた薩摩藩士中沢由郎が、広浦に移住して漁業に従事し、浦の女性と結婚した。長身で骨格が逞しく、眼光の鋭い剛直な武士タイプであった。この人は広浦の天満社で珠算を教えた。後年、東中浦村役場に筆生として勤務し、寺子屋の師匠を止めて羽出浦に居を移したが、妻子は広浦に住んでいた。

古田・中沢両家の子孫は、共に広浦に住んでいる。

明治二五年、各地に尋常小学校が設置されたが、島江・猿戸・広浦の三部落は、東中浦村中越分教場が遠過ぎたので、

米水津村間越分教場に依託することになった。しかし、広浦の生徒達は間越も遠いから、部落の寺子屋で学んでいた。広浦の寺子屋で勉強した児童で、現在存命中の人は木村小三郎翁のみである。同氏の話によれば、島江の清田才藏・山本九平、猿戸の浜田武藏などが習ったが、故人になってしまった。私も少年の頃に、広浦の寺子屋のことを耳にしたが、寺子屋の話をしてくれたのは、寺子屋時代より後の人である、広浦の山崎大藏、猿戸の浜田正義両翁である。

丹賀浦 過疎の続く丹賀浦は、現在驚くほど戸数が減っている。文化七年の藩の調査では、羽出浦六七戸・三七一人、丹賀浦六二戸・三四六人、中越浦四二戸・二六八人、梶寄浦二七戸・二四二人、大島二〇戸・四四三人である。人口は大島が最大であるが、戸数は丹賀浦が羽出浦に次いでいる。ちなみに梶寄浦と大島はまだ大家族制であったと思える。明治三五年頃には、大島一八〇戸、羽出浦一六五戸、中越浦一四〇戸、梶寄浦一四五戸、丹賀浦一〇五戸で、丹賀浦の戸数増加は少ない。

しかし、丹賀浦の宮や庵は、他の浦並に立派であったので、寺子屋はあったと考えられる。交通事情が悪い上に老齢であ

るので、丹賀浦出身の教育長渡辺寿一氏をわずらわした。同氏の祖父渡辺儀三郎（弘化元年生まれ）は、読み・書き・珠算が達者で、父佐十に教えていたので、寺子屋で習ったことが考えられるとのことである。また、神崎広藏（慶応元年生まれ）などが、宝林庵の如雲さんに読み・書きを学んだのは、明治初年と思われる。宝林庵裏手に建った簡易学校では、三浦福治郎（明治八年生まれ）・渡辺佐十（明治一三年生まれ）が学んだという。なお、渡辺佐十は寿一氏の祖父で、日露戦争に従軍し、在郷軍人会東中浦村分会の元老格であった。

大島 大分大学の鹿毛基生教授によれば、市野瀬春宗が大島で寺子屋を開き、男一人・女五人に素読・習字を教えていたという。大分市大南地区同好会発行の「落穂」によれば、広瀬淡窓の成宜園の入門簿に、一ノ瀬春操の悻、春林（二三才）が嘉永五年三月に入門したことを、記してあるとのことである。

以上のことによって、明治以来、大島は奨学の念が篤く、学業成績の優れた青年が出ていたことがうなずける。なんにも、大島は交通が不便なので、郵便局長古川正彦に調査を依頼した。昔の寺子屋跡として、地図を付して教示された

地点は、最北端の人家も少ない水ヶ浦で、市野瀬氏の寺子屋

跡とは考えられなかった。そこで電話で照会したが、古川氏

は出張して不在だった。やむなく局長代務者の神崎氏に教示

してもらった。神崎氏は、佐伯藩初代毛利高政の古文書を所

蔵する旧家の出である。同氏のご教示によれば、水ヶ浦の寺

子屋跡というのは海林寺のことである。この寺の和尚は切支

丹であったが、改宗して仏門に入ってから寺子屋を開いた。

地下部落の正徳庵は、廃寺となった海林寺を解体して建てた、

ということを先代から開いているということであった。また、

医師で寺子屋を開いたのは、毛利侯の御典医であった並河氏

である。並河氏は藩侯の勘気に触れて大島に來た。寺子屋を

開いていたが、その後田舎に引き揚げ、寺子屋跡は不明であ

るといふ。前記市野瀬氏と並河氏は共に医師であるが、別人

と思われる。大島の寺子屋教育は盛んであったことが偲ばれ

る。

吹浦 吹浦は大庄屋軸丸家の所在地であるから、他の浦より

も寺子屋が早く始まった可能性は大きいと予想する。大庄屋

の軸丸家は浜、小庄屋の染矢家？は奥に居た。浜の阿弥陀庵

を本教所、奥の地藏庵を分教所とよんだといふ。吹浦老人クラ

ブ会長庭瀬勝利翁の案内で、阿弥陀庵や地藏庵を訪れた。

阿弥陀庵は、浜の庵とか地下の庵と呼ばれ、村端れの丘の

上にある。寺子屋の師匠であったと伝える、光覚上座の墓は

大杉の元にある。過去帖には、長門国阿武郡今浦 円通寺徒

弟と記してある。光覚上座は明治六年に亡くなっているが、

彼の死後から吹浦学校の開設までは、誰が師匠であったので

あろうか。吹小学校沿革誌によれば、吹簡易小学校が明治二

〇年五月三日に開校した時、阿弥陀庵を校舎に使用している。

地藏庵は、先住笹木氏の死亡後は、後室が法灯を守ってい

た。師匠であったと伝える二基の墓を調べた。天保一二年に

亡くなった智光禅門は能筆だったので、明治・大正時代に、

字の上達を願う子供達が、墓石の文字を指でなぞっていた、

と庭瀬翁が語ってくれた。明治八年、慈照上座が亡くなった

後の師匠は不明である。寺子屋で習った老人は既に無く、人

伝てに聞いた話をうろ覚えしている老人も稀である。庭瀬翁

は、奥部落の九〇才になる高齢者の話を、次のように語って

くれた。半紙何十枚かを綴じた手習草紙に、墨をたっぷり含

ませた筆で、べたべたに書きなぐっていた。草紙の全面が真

黒く、ぴかぴか光るのが面白かった。また、算術の時間は、

算盤と暗算による加減乗除であったが、初心の子供達は指を使って教えられたとのことである。

松浦 地松浦の庵主の話によれば、常光庵で教えたのは、孝順和尚（嘉永六年亡）・仏海上人（明治二五年亡）の二人であると伝える。孝順和尚の遺骸は、郷里に持ち帰ったので松浦にはない。仏海上人は七五才で亡くなったが、墓は別に建てず、地藏像の下に埋葬したという。島田耕氏のご教示では、島田氏の祖父が習った庵主は達筆であり、明治三年生まれの母君も寺子屋に通われたという。

沖松浦の東喜太郎翁のご教示によれば、師匠の中では、範隆という人は伊予国吉田藩士で、教え方が厳しく、墓は吉祥寺にあるとのことであった。範隆と恵照二基の墓には、伊予国吉田藩関係の文字が刻まれている。両者は血縁か師弟関係があったのであろうか。

松浦小学校沿革誌によれば、明治一六年一二月、小学校開設当時は、両松浦庵を教舎に充てている。両松浦庵とは、地松浦の常光庵と沖松浦の吉祥寺である。

有明海 桑野浦では庵の下の家で教えていたという。日野浦では区長さんにお聞きしたところ故卜部松五郎などは、お

宮の下の寺子屋で習ったとのことである。しかし、明治二〇年四月、お宮の下に簡易家が建っているので、卜部翁が学んだのは寺子屋ではなかったかも知れない。帆波浦には寺子屋はなかったようである。オモヤの渡辺与一郎という人は、山を越えて羽出浦に通っていた、と話してくれた人があった。鮎浦での寺子屋については、何の端緒もつかんでいない。

3 学校

「佐伯市 南海部郡 郷土教育史要覧」に、明治七年大島、明治九年梶寄と丹賀に、学校が開設された、と記しているのはどうであらうか。明治一三年の「学校表」には、羽出と大島が本校で、羽出の分校として中越・丹賀・梶寄が記してある。また、中浦小学校の沿革誌にも、作網代に羽出小学校を設置したのは、明治一三年三月一日とある。羽出浦に学校は開設されても校舎はなく、作網代の用務所の一部を充てたり、福聚庵を使った時もあったようである。用務所は木造瓦葺きの平家であった。明治八年、大島御番所を移したから、軒先瓦に旧佐伯藩主毛利家の矢筈紋があった。用務所の表側の大広間を事務室、裏側の二部屋と台所を、職員の住宅兼教室にしていたようである。大正八年、村役場が丹賀に移ってからは、校長

住宅としていたが、昭和二〇年の台風で倒壊した。

明治一二年、慈船和尚が亡くなってから、明治二〇年に簡易学校が開設されるまでは、用務所職員が羽出学校で教えたのではないかと推測する。明治・大正期の古老達は、寺子屋と簡易学校をよく話題にしていたが、羽出学校で学んだ人が一人もいなかったのは不可解であった。そして古老の話の中に、佐伯から来て用務所に勤めていた人を、〇〇先生と役所職員に対する以上の敬称で話すことが、しばしばあったのを記憶している。

明治二〇年、改正小学校令によって、各地に簡易学校ができた。羽出浦では福聚庵の一室を校舎に充てた。二五年に尋常小学校となっても、校舎は依然として庵の二室であった。明治二七年四月から、天満宮下の大鳥居横にあった、古い二階建の民家を改造し、二階を職員住宅、階下を教室にして、四学級の複式授業をした。西野浦に新築移転したのは、明治四一年四月のことである。

吹浦では前に記したように、地下の阿弥陀庵を使い、新校舎が落成したのは明治三二年一月六日である。松浦小学校の創設は、前に触れたように、明治一六年一二月で、両松浦庵

を校舎に充てていた。明治一九年四月、沖松浦に縦六間三尺、横三間の二階建校舎を新築した。場所は江口の野中さんの道を距てた所である。明治三三年五月、地松浦に新校舎が落成したため、旧校舎はその後野中家の所有となった。野中老夫人の話では、汚い四室くらいの家を修繕し、入院室に充てていたが、二、三〇年前に解体したそうである。

日野浦の簡易学校は、明治二〇年四月、お宮の下に建てられた。後に松浦小学校の分教場となったが、校地・校舎とも狭隘であった。明治末か大正初め、平間部落端れの海岸を埋め立て、有明小学校を建てたと記憶している。桑野浦から鮎浦までの児童が入学した。

明治二三年、改正小学校令で簡易学校が廃止され、南海部郡の小学校は三六、分教場は二〇となった。明治三〇年、浦代・蒲江両小学校に高等科が併置された。高等科に進んだ羽出浦の児童は、往復一二杆の山道を浦代まで通った。明治四二年四月一日から、小学校の修学年限は六年となった。中浦小学校に高等科が併置され、尋常高等小学校となったのは大正一二年からである。

参考までに、旧東中浦村の、明治三六年度の学校を表示す

れば、次の通りであるが、創立年については疑問がある。

学 校 名	創 立	教員数	児童数		年間経費
			男	女	
東中浦尋常小学校	明治二七年		三四八	四九四	〇八円
中越分教場	二〇年		二四三	四八三	六九円
丹賀	二〇年		一三三	三三八	二六九円
梶寄	二〇年		一四六	三三七	二六〇円
大島	七年		二七八	八七二	三三九円

第七章 子守唄・童唄・口説

1 子守唄

へ寝ねしなせ寝た子は可愛い、起きて泣く子は面憎い ホ
ーラ、ホーラ、ネン、ネンヨー、ネンネン、コロリヤ、オコ
ロリヨ。

へこの子良い子じゃ良い子の守じゃ、この子育てた親見たい
へこの子良い子よ牡丹餅顔よ、黄粉つけたらまだ良かる

へ私々こんまい時七つの年に、親に死なれて子守出る

へ親が難儀すりゃ子供の時に、子守出されて泣き暮らす

へあん子あん畜生を谷ん中へ蹴込め、上がるそばからまた蹴
込め

へ他人のことちゃ言いたい見たい、とかくわがこた隠したい
へあいつあん畜生がけ死ぬりゃ良い、猫のどうわた買うて祝
いしょに

へ人に当てようた戸板に目釘、何度当てたて当たりやせぬ
へあいつ面見りやおこせの面よ、見れば見るほどおこせ面
へわたしゃかんまんどう言われても、それを苦にするわしじ
やない

へ要らんお世話を他人が焼くな、焼いて良ければ親が焼く

へわしのこんまい時や縮緬襦、今は繩飛び繩

へこの子泣かかんちゅうて守来てみたら、何が泣きめか泣き暮らす

へ雨は降り出す洗濯物は濡れる、可愛い子は泣く日は暮れる

へ泣くな源ちゃん泣かんとかたれ、泣いちゃ日も日もたまり

やせぬ

へあいつ面見りや胸糞が悪い、山椒味噌の芽で胸直せ

へわしが死んだら誰が泣いてくりよか、千里奥山の蝉が鳴く

へ蝉じゃござらんちやごろでござる。ちやごろ可愛いや蝉憎

くや

へわしが死んだら往還端に埋けて、通る若い衆に拜ませて

へわしがこうして子守に来ちよら、旅の者じゃと面憎む

へ旅の者じゃと可愛いがっておくれ、可愛いがるお方を親と

見る

へわしとお前は二枚の屏風、離れまいぞや蝶番

へわしは小浦の粟島様に、灯明明かして願ほどく

へ山が高うして丹賀が見えぬ、丹賀可愛いや山憎くや

へ一夜泊まりの遍路にはれて、付いちゃ行かれぬ泣き別れ

へ親の意見となすびの花は、千に一つの仇は無い

へ好いちゃおれども身が儘ならぬ儘にならぬ身を惜しゅうござる。

へ儘にならぬとお櫃を投げて、お台所は飯まよだらけ

へ沖の大船ろくろで締める、わしとあなたは寝て締める

へ船が一ぱい来りやお客さんとかと思つて、宿のおげんさんが走り出る

へ沖の鷗に潮時聞け、わたしや立つ鳥波に聞け

へ沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀州の蜜柑船

へ蜜柑船なら急いで下れ、冬のあなじは西になる

へあなた恋しても高嶺の花、いくら想うても手がとわぬ

へあなた思えど身は儘ならぬ、出るに出られぬ籠の鳥

へ籠の鳥じゃと嘆く小鳥、籠の破れることもある

へこと中越かねに鉄の橋掛けて、中のくぼるほど通いたい

へわしとあなたは出雲の神の、結び合わせた仲じゃもの

へうちのお父さんお酒が好きよ、今日も朝から茶碗酒

へうちのお父さん鯛釣り上手、他人ひとが千釣りや二千釣る

へうちのお父さん島ん浦沖で、波に揺られて鯛を釣る

へわたしとあなたはどうした縁か、袖の触れ合う他生の縁

へ肥後や対馬は愚かなことよ、世界の果てまで行きたいの

へ嫁じゃ嫁じゃと嫁の名を立てる、可愛いわが子も他人ひとの嫁

へ、死んでまた来るお釈迦の身なりや、死んでみせます今こ
で

へまじの風じゃて酷う吹きや寒い、どんなおかみさんも屁は
臭い

へ羽出良いと今朝日を受けて、住める人達や和やかで
へ心大分身は兵庫県、落ちる涙は機の上

へうちの父ちゃん芋食うて死んだ、芋が芽を出しゃ思い出す
へ嫌じゃ嫌じゃと畑の芋は、かぶり振り振り子ができた

へ（註 明治・大正時代に鐘紡へ女工として行った者があつ
た）

へ山で赤いのはつつじに椿、まだも赤いのが女郎のへこ
へ山で床とりや木の根が枕、落ちる木の葉が夜着布団

へこと烏江は棹差しゃ届く、なせに届かぬわが思い
へ往のうか猪之助戻るか茂助、ここで別りよか源之助

へわしのすうちちゃん知らなきや言おか、薬で髪結うて鼻垂れ
て

へ死んでなるかや二十二や三で、墓に茶碗が据えらりよか

へ鼻の地藏さんに団子を据えて、早くややこのでできるよに

へわしが死んだらお酒を据えて、煙管卒塔婆に立ててくれ

へお前さんとなりや戸は筵でも、掛け金縄でもいとやせぬ

へねんねこぼいち竹馬与市、竹にもたれて思案する

へ唄を歌いましよ流行の歌を、あたり触りはご免なれ

へいしまおげんさんのお幽黒壺は、鉄かねを入れんでも浮いて来
る

へ雨が降るのは懃かなことよ、雪の千夜も降れば良い
へわしの思いは戸穴の役場、煉瓦造りの硝子窓

へお前さんとなりやわしゃ何処までも、江戸や対馬の果てま
でも

へ娘十七、八嫁入り盛り、箆筒・長持ち 狭み箱
へそれはど揃えてあのやる時にや、いたら戻るなへ戻るな

へ下関行きや櫓杭が踊る、鉄の錨が浮いて来る

へそこで娘の言う言葉には、父様とと・母様かかそりや無理よ

へ雨よ降れ降れ千百日も、船の鱧綱腐るまで

へ千石積んだる大船でさよ、むこう嵐が来たならば

へ一で玄海二で遠江、三で日向の赤井灘

へ鱧をくると舵取り直し、元の港にまた戻る

へ寒い北風冷たいあなじ、吹いて温いがまじの風

へ宮に参ったらどう言うて拜む、一代この子がさかしいよう

へねんねん山の兔の子、どうしてお耳が長いのか。こんまい時にとっちゃんが、お耳をくわえて引っ張った、それでお耳が長いのか。

へお月さんいくつ、十三九つ。まだ年や若い、若い子を持つて。この子誰に抱かしよ、お方に抱かしよ、お方何処行く、油買ひ酔買ひ。油屋の前で、油德利打ち割った。その油どうした、犬がねぶつてもうた。その犬はどうした、太鼓に張つてもうた。その太鼓どうした、天に登つてもうた。あつちのはしじやドンドンコ、こつちのはしじやドンドンコ。ドンドンコといっている間に、それ落つちた。

へねんねんころりよおころりよ、坊やは良い子じゃねえしな。坊やお守は何処に行た、あの山越えて里に行た。お里のおみやげ何貰うた、でんでん太鼓に笙の笛。起きたら叩かしよ、笛吹かしよ、鳴るか鳴らぬか吹いてみよ。ねんねんころりよおころりよ、坊やは良い子よねえしな。

2 童唄

(1) 手毬唄

へ一番目の一助さんの、量る上米は、一万一千、一百石一斗、一升一合まで、量り納めて、二番目に渡した。

へ二番目の二助さんの、量る上米は、二万二千、二百石二斗、二升二合まで、量り納めて、三番目に渡した。

注 円陣か一列横隊に並び、順番に手毬をついて送る時に歌う。歌詞は十番までである。最後の子供は手毬を手の甲に受け止めた。

一つ一つ一つや…、二つ二つ二つや…

注 手毬をついて反動をつけ、空中に高く上がると、素早く身体を一回転してつく。また、反動をつけて回転してつく。つき損ねるまで繰り返す。失敗すれば次の子供に渡す。手毬をつく子供も、見ている子供も歌って囃す。反動をつける間は「一つ一つ一つ…」を続け、空中に高く上げる時に「一つや」と歌う。

へ一番初めは一の宮、二は日光の東照宮、三は佐倉の宗五郎、四は信濃の善光寺、五つ出雲の大社、六つ村々鎮守様、七つ成田の不動尊、八つ八幡宮、九つ高野の弘法様、十で東京二重橋

(2) お手玉唄

へおしろのさん、おんさまだいじよは、いずこでおかごで、いかさのどん、さしたかどん、しのぶかどん、どんどとはやるは、どのかみさまか、ここはしのさかえのどん、おんよしよしどの、よしぞうさん、こまぞうさん、おとはつつあん、ひーに、ふーに、みーに、よーに、いつに、むうに、ななに、やーに、この、とうに、東京婦りのお芋屋さん、お芋一升いくらかえ、三厘五毛でございます、もつとまからんか、まかりきほん、お前さんのことならまけてやろ、ざるおろせ、研下ろせ、頭を切るのが八つ頭、尻尾切るが唐の芋、蕪の行水、鳥の行水、羽根をばたばたして一たいじや。

へおごとつ落として、おっしゃら、おみな落として、おっしゃら、お手さん落として、おっしゃら、手挟み手挟み、おひとつ落として、おっしゃら、おちりんこおちりんこ、落として、おっしゃら、小さい川渡れ、小さい川渡れ、おっしゃら、大きい川渡れ、大きい川渡れ、おっしゃら、こうひじこうひじ、叩いて鳴らして、叩いて鳴らして、叩いて鳴らして、おっしゃら。

(3) 羽根つき唄

へひと目に、ふた目、みやこし、嫁御、いつやに、むさし、

ななやに、やくし、このまえ、とうらせん。

へいちじく、にんじん、山椒に、椎茸、牛蒡に、むかご、七草、初茸、くねんぼに、唐辛子。

(4) その他

へかごめかごめ、籠の中の鳥は、いつ出て遊ぶ、夜明けの空に、朝日の光、燦く時に、（後は誰）。

へお月さん偉いな、お日様の兄弟で、真丸になったり、三日月になったり、春夏秋冬、日本中を照らす。

へお月さん偉いな、お日様の兄弟で、盆のようになったり、櫛のようになったり、春夏秋冬、日本中を照らす。

へ雁かり渡れ、鰯かりになれ鰯かりになれ、大きな雁は先に、小さな雁は後に、仲良く渡れ。

へ雁かん渡れ、棹かんになれ釣かんになれ、疲れたなれば、下りて来て遊べ。

へ雁雁お前らは何処が好き、お国でいうなら涼しいお国、池の辺や海辺が好きよ。

へううのが尻をひった、なんばひった十ひった、十の町聞こえて、百貫鍋ひり割って、和尚さんから叱られた。

へほーほ蛍来い、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、ほーほ蛍来い、わたしの手元に蛍来い。

へ涼風そよぐ夏の夕、小川の辺を独り行けば、月影静かに水に澄みて、岸辺の小笹蛍飛び交う。

へ互いに励まし良きに進み、共々こらして悪しきを避くる。これこそ誠の正しき友よ、これこそ誠の隔てぬ友よ。

3 口説

(1) 小五郎口説

鶴は千年亀万年も、扇目出たな末広がりで。祝いこんだが炭がまの中、万の長者のゆわれを聞けば、親の又五郎玉田の生まれ、なれど小五郎は拾い子なれば。何処の者やら氏筋知れん、氏が知れねば炭焼きなさる。都大内公卿大納言、大納言とも言われる人の。一人娘に玉代の姫と、何の報いか不きりような生まれ。広い都に添う夫がない、夫がないとて三輪明神に。七日七夜の断食籠り、六日泊まりて七日目の晩。夜の九つ夜半の頃に、へ夢か現かおん幻か。へ六十余りの老人が出て、姫よ姫よと二声三声。そちを起こすは余の儀ではない、そちと一代連れ添う夫は。此処にないない都にもない、九州豊後の三重内山に。薬で髪結に炭焼き小五郎、これがそなた

の一代の夫。早く急いで九州に下れ。言うて老人早や消えにける。そこで姫君おん目を覚ます、ああれ嬉しやお告げでござる。そうこうするうちその夜も明ける、そこで姫君下向にかかる。急ぎ急いでわが家に帰る、わが家帰りに両親様にかの次第を細かに語る、言えは両親うち喜んで。日柄見立てて九州に下れ、そこで姫君うち喜んで。日柄見立てて、さあさこれから旅装束よ。夏に帷子冬着る布子、手貫手拭い水掛け脚絆。三節こめたる寒竹の杖、笠の上書同行の二人。うちを出る日を吉日として、今日は日も良い九州に下る。そこで姫君お暇告げて、さらばこれから九州に下る。伏見町からこばやを備い、水夫が三人姫君と四人。三挺ばように櫓杭も添えて、さあさ押せ押せ船子の者よ。急ぎや程なく大阪に着く、大阪町にて四、五日逗留。明日はいよいよ九州に下る、そこで姫君申することに。申しこれいな船子の者よ、船をこうか陸路行こか。大阪町から船乗りまする、いちのぼうぎに風うけまして。追風次第じゃまた帆を巻き揚げて、七里八里は兵庫の灘よ。ここは何処よと船子に問えば、ここは一の谷敦盛様の。み墓所がさておいとしや、水はなけれど水島灘や。ともの白石とんとと下る、急ぎや程なく九州に着いた。

上がる所は府内の町よ、府内町にて四、五日逗留。府内町から臼杵の城下、臼杵町でも四、五日逗留。明日は日も良いお山に登る、急ぎゃ程なく三重内山の。山の麓の草切り子供、そこで姫君もの問い掛ける。申しこれいな子供衆様よ、これなお山で炭焼く人は。どちでござるか教えて給え、言えは子供が申すことに。味なこと言うて都の姫よ、そこで子供が申せしことに。こんなお山で炭焼くは、へこの山越えて先の谷。へもやの如くに煙が上がる、これを尋ねて行きやれ姫よ。言えは姫君うち喜んで、またも急げば三重内山の。山の麓で山子に出会ふ、そこで姫君もの問いかける。申しこれいな山人様よ、こんなお山で炭焼く人は。どちでござるか教えて給え、言えは小五郎が申すことに。こんなお山で炭焼く人は、外にないわいたしが一人。言えは姫君うち喜んで、ああれ嬉しやわが夫様か。言えは小五郎が申すことに、なんと言わんす都の姫よ。独身ひとりみでさよたたれぬわしが、まして二人がどうたたれよか。言えは姫君申すことに、二人たつよな仕様がござる。これを持って行て米買うてござれ、米を知らねば麦買うてござれ。米よねを知らねば稲買うてござれ、そこで小五郎が思いしことに。三斗呷を小脇に抱え、行けば行く行くそ

の行く道に。道の畔に小池がござる、小池の中にはおしどり一羽。さてもきれいなおしどりなれば、あれを打ち取り都の姫の。姫のみやげに求めんものと、近所まわりを見渡すけれど。取つて投げよな小石もないが、膚に着けたる小判を出して。とんとすとんとすとんととんと、鳥は舞い立つ小判は沈む。行くに行かれぬわが家に帰る、わが家帰りて都の姫に。

右の次第を細かに語る、言えは姫君うち驚いて。こんなわが夫馬鹿ではないか、言えは小五郎はうち笑いつつ。あれが此の世の宝であれば、わしの炭焼くあの谷々は。山の山ほど小山の如く、なんばあるやらつもりは知れん。言えは姫君うち喜んで、日柄見たてて山見物よ。今日は日も良いお山に登る。夫婦揃つて山見物よ。そこで姫君申すことに、申しこれいなわが夫様よ。あれに見えるが大判小判、こちに見えるが一分や一朱。しばし間は見物なざる、急ぎ急いでわが家に帰る。さあさこれから普請のよだち、その日暮らしの小五郎さんが。西と東に金蔵建てて、拾い集めた大判小判。千駄万駄の駄賃を雇い、黄金千杯また朱千杯。屋敷求めて家倉建てて、四方白壁八つ棟作り。朝日輝く夕日のもとに、鶴は千年亀万年も。お前百までわしゃ九十九まで、共に白髪のまた生えるまで。

真名の長者と世に仰がれて、語り伝わる後の世までも。

(2) 牡丹長者口説

池が瀬となる瀬が淵となる、何処のことかと尋ねるならば。因はこうない常陸の国よ、牡丹長者のゆわれを聞けば。四方四面に家倉建てて、屋根のかかりを申そうなれば。八方三階八つ棟造り、八つの棟をば揃える長者。小坪回りに堀川掘らせ、裏に泉水築山飾り。金魚銀魚や鯉鮒生かし、三つの牡丹に朝日を受けて。備後こうらい錦の幕よ、うたせ給えよ長者の威勢。鷹が二羽に乗馬二匹、許しとらずにこしばにおいて。朝と晩とに曲乗りなさる、末の代取りは和子三人よ。兄が次信中吉野丸、三に三男三郎丸と。どれも劣らぬ嫁迎えとる。へ姉嫁さんの由来を聞く、へ東三十三か国。朝日長者のまず一人姫、これが長者の姉嫁となる。へ中嫁さんの由来を聞く、へ西は三十三か国。夕日長者のまず一人姫、これが長者の中嫁となる。へ乙嫁さんの由来を聞く、へもとは京都の公家さん育ち。数多別輩さん口故に、桜御殿をおすべりなさる。物の哀れは紅葉の前、空船うつろにて流されます。空船とはなに木で造る。紫檀黒檀唐木で造る。縦の長さを一丈二尺、横の広さを一丈二尺。縦と横とのなれ合いの船、継ぎ目接ぎ目に鉛

を入れて。へさて文月や文月や、へ文月七日に造り上げ。夜と昼との界が知れぬ、共に表に透かしを入れて。夜と昼との界を知らず、親煩惱に子の可愛いさに。蘇鉄団子やくくどの菓子をも、一つ食べれば三日三夜。二つ食べれば七日の食事、流すその日が文月十日。唐と日本の潮境にて、ここが境と突き流される。此処に三日や彼処に五日、流れ流れて七十五日。流れ着いたが常陸の国よ、島の屋形には流れ着き、島の大夫の拾い子となる。そこで大夫さん名を付け替える。波に揺られて流れたからは、それをかたどり名は百合姫と。これが長者の乙嫁となる、なれど乙嫁長者の気入り。長者夫婦の気入りであれば、何も乙嫁彼も乙嫁。それを嫉んでかの姉嫁は、申しこれいな中嫁さんよ。あれな乙嫁長者の気入りであれば、あれをあのまましておいたなら、わしとお前は水仕の務め。言えば中嫁申すことに、わしも前からそう思えども。貴女気兼ねでわしや言いません、島の大夫の拾い子なれば、手元の縫い針調べて見よう、そうこういううち正月も来る。頃は正月十一日よ、町も田舎もある商人も。大福帳の上書きを、和子も三人書き初めなさる。長者夫婦は縫い物競べ、そこで姉嫁申すことに、申しこれいな乙嫁さんよ。へそれ縫い物

競べをしょじゃないか。縫い物競べに負けたなら、庭に下がりて水仕の務め、言えは乙嫁賢いもので。何と言わんす姉嫁さんよ、島の大夫の拾い子なれば、手元の縫い針知らざるけれど、貴女方から縫いたるなれば、知らずながらも一針なりと。縫うて見ましよう姉嫁さんよ、そこで姉嫁理に詰められて。さらばこれから縫わねばならぬ。千畳座敷に早や立て籠り、二間長持ち蓋突き上げて。綾と錦の白地を出して、千畳座敷の座の真ん中に。金の屏風を立てさせ置いて、綾と錦の白地を広げ。さあさこれから針取り出して、へこくどの針が四十五本、へ金の縫い針三十五本。さきに五色の糸つなぎ止め、へ先ず一番の針立ては。へ一國二國三ヶ國、四國讃岐の屋島の磯辺。源氏平家の御戦いに、どちも勝負のつかざる折に。平家方なる沖なる船が、的の扇を揚げたる船を。奈須の与市が弓射るところ、両の肩からこづまを上げて。磯辺の千鳥で針を止め、これを長者に飾らせおいて。さあさ縫わんせ中嫁さんよ、それをしょのんで彼の中嫁も。千畳座敷に早や立て籠り、二間長持ち蓋取り開けて。綾と錦の白地を出して、千畳座敷の座の真ん中に。金の屏風を立てさせ置いて、綾と錦の白地を広げ。さあさこれから針取り出して、へ

こくどの針が四十五本。へ金の縫い針三十五本、さきに五色の糸つなぎ止め。へ先ず一番の針立ては、へ牡丹に唐獅子竹に虎。へ雪折れ笹に群雀、へぱつと舞い立つたまた舞い戻る。両の肩からこづまを上げて、へまつがわびょうしで針を留め。これを長者に飾らせおいて、さあさ縫わんせ乙嫁さんよ。それをしょのんでかの乙嫁は、裏のこづばに早や走り出て。うがい手水でわが身を清め、天に向いて両手を合わし。申しこれいな日輪様よ、いつは縫わずも今日一日は。縫わし給えよ日輪様よ、千畳座敷に早や立て籠り。二間長持ち蓋取り開けて、綾と錦の白地を出して。千畳座敷の座の真ん中に、金の屏風を立てさせおいて。綾と錦の白地を広げ、さあさこれから針取り出して。へこくどの針がただ二本、へそれに五色の糸さし揃え。へ先ず一番の針立ては、へ勿体なくもお日お月。へ伊勢では天照大神宮、へ高野山では弘法大師。二十四孝や世のことも、へ一つや二つ三つや四つ。十にも足らぬ幼な児が、賽の河原に集まりて。河原の小石を拾い奇せ、へ一重築いては父のため。へ二重築いては母のため、へ三重築いては娑婆の友。へあれ兄さんや姉さんの、へ追善供養と築き並べ。

へ阿貴の鬼が現われて、へ築いたる石を荒らされる。両の肩からこつまを上げて、南無阿弥陀仏で針を留め。長者の横に飾らせておいて、長者夫婦が拝見なさる。どれもできた一度は賞める、へさて姉嫁さんの縫うたのは。へこれは手筋は良いけれど、源氏平家はこれなに事か。未だ屋島に戦いあれば、いかな長者もてはなすない。へ中嫁さんの縫うたのは、へこれも手筋は良いけれど。獅子に牡丹はこれ良いけれど、竹に雀はこれなに事か。長者家には数鳥いらん、乙嫁さんの縫うたのは。これは手筋もよくできた、へ勿体なくもお日お月。へ伊勢では天照大神宮、高野山では弘法大師。二十四孝やえいざんごうも、天の河原で延命地藏。この世ばかりかあの世のことも、へ一つ二つや三つや四つ。へ十よりうちの幼な児が、賽の河原に集まりて。へ一重築いては父のため、へ二重築いては母のため。三重築いては婆娑の友、あれ兄さんや姉さんの。追善供養と築き並べ、阿貴の鬼が現われて。築いたる石を荒らされる両の方からこつまを上げて。南無阿弥陀仏で針を留め、これが長者の宝物となる。そこで姉達負けたとあれば、衣裳競べで落とそじゃないか。頃は三月雛祭りにて、今日は日も良い衣裳を出して。競べましようよ乙嫁さん

よ、そこで姉嫁得意な顔で。千畳座敷に早や立て籠り、綾が七棹錦が八棹。金襴緞子や博多の帯を、山と積みます部屋一面に。さあさ出しなれ乙嫁さんよ、涙押さえて乙嫁さんは。島の大夫の拾い子なれど、もとを正せば公家さん育ち。十二単が唯一よ、長者夫婦が拝見なさる。綾や錦や金襴緞子、山と積まれてありますけれど。綾や錦は衣裳ではない、十二単は尊いものよ。これは長者の重物にする、長者言葉に姉嫁二人。泣かぬばかりに目を伏せなさる、暫ししてから長者は語る。人を落せばわが身が落ちる、家内仲よく暮らすが宝。そこで姉妹根性直す、共に仲良くお暮らしなさる。鶴は千年亀万年も扇目出たな末広がりにて。眞の長者と世に謳われる、牡丹長者のまず一説よ。

(3) お為半蔵

淵で身を投げ刃で果つる、心中情死は世に多けれど。鉄砲腹とは今度が初め、何処の事よと尋ねて聞けば。頃は寛永二年の頃で、国は豊州海部の郡。佐伯領土や堅田の谷よ、堅田谷では宇山が名所。名所なりやこそお医者もござる、医者その名が玄了様よ。「それ親はこの世の油火の、光も高き油火の。光も高き行灯の、消ゆる思いは玄了様よ。」消えてし

まえば世に名を残す、家の世継ぎに半蔵というて。幼な時から利巧な生まれ、親の譲りの医者し習うて。匙もよう効く診察も上手、堅田在郷かご城下までも。しつく病は半蔵が治す、なれど半蔵は伊達者であれば。襟を着重ね小褌を揃え、足にや白足袋八つ緒の雪駄。しゃなりしゃならで病家を回る、「それ行き来る人が立ち戻る。あれが宇山の半蔵さんか、」半蔵良い医者良い若い者。賞める言葉が身の仇となる、「五月の雨が模様する。」 やつす女の伝えを聞けば、同じ流れの川下村の。潮の満干を見る柏江の、渡り上れば修験はきしよがござる。修験その名が龍正院と、龍正院という山伏の。二番娘にお為というて、なれどお為は綺麗な生まれ。目許口許襟立ちぬんで、殊に鼻筋ごさんの器量。立てば芍薬座れば牡丹、歩む姿は百合げしよの花。手元の縫い針織機までも、広い堅田に並びはなけりゃ。堅田一での評判娘、なれど柏江船着きなれば。船の船頭や舟子の者が、お為お為と皆恋掛ける。それに半蔵が想いを寄せて、いつかどうぞと恋路の願い。胸に焚く火の燃ゆれはすれど、人目ある世のままにもならず。前の継橋渡しは絶えて、磯の鮑のただ片思い。思い兼ねたる心の祈り、どうぞ助けて逢わせて給え。逢うて思いを遂げさすなら

ば、一生断ちましよ鰻と卵。神や仏も心の誠、うけて哀れと思ひし甲斐か。頃は正月二十八日よ、村の鎮守の竜王様の。年に一度の初春祭り、広い堅田の老若男女。われもわれもと参詣すれば、お為・半蔵も氏子で参る。登る半蔵に下向する蘭となる。お為、一の鳥居の左の脇で。ふっと半蔵はお為に出逢い、積もる思いに人目も避けず。しかと手を取り顔打ち守り、申しこれいなこれお為さん。わしは真実お前のことを、寝ては夢見る覚めては思い。思い暮らして照る日も曇り、冴えた月夜もまた蘭となる。蘭に迷いて三度の食も、胸に詰まればついしゃくの種。しゃくが病の手引きとなりて、こうも瘠せたは皆貴女故。どうぞ一夜の迷いの雲を、晴らせ給えやこれお為さん。言えはお為が申せしことに、物の数にも足りないわたし。誠真実それほどもでも、言うてくれるは嬉しいけれど。わしの身の上ご推量なされ、幼な時から継母育ち。親が許さにか身は籠の鳥、籠の鳥なら身はまきならず。外の御用ならいかよの儀でも、叶え上げます半蔵さんよ。恋路ばかりはお許しなされ、言うに半蔵は気もせきのぼせ。こうも心の奥底割りて、耐える思いを告げたるものを。ひとの親切仇にぞ受けて、靡くまといとはそりゃどう欲な。物にたとえて申すでないか、み山隠

れの春咲く椿。なんぼ色良く咲いたるとても、人が通わにや盛りは知れぬ。盛り過ぎれば風吹き散らす、まだもたとえて申すではないか。山の谷々生えたる石菖、嫌な水でも出て来りや靡く。まだもたとえて申すでないか、向こう遥かの篠竹数の。今年生えたる若竹さえも、止まる雀に、宿貸しなさる。まだもたとえて言うではないか、お為あれ見よ山中つつじ。なんぼ色良く咲いたるとても、誰も手折らにやその根で朽ちる。まだもたとえて言うではないか、沖の大船帆かけた船も、港見掛けりや一夜は泊める、釈迦も昔は七十三で、玉の^{きさき}後の小夜照姫に、恋をなされたたとえもござる。七月七日を盆として、七月七日その晩に。川を隔てて恋路をなさる、鮎は瀬に棲む鶴は淵に棲む。人は情のその下に住む、どうぞ一夜の迷いの雲を。晴らせ拾えやこれお為さん、言えばお為が理に詰められて。申しこれいな半蔵さんよ、貴方それほど真実ならば。親の許さぬ帯解くからは、一夜二夜なる契りは嫌よ。二世も三世もまだ先の世も、変るまいとの誓いをしましよ。当座ばかりに眺める花も、仇な浮名を世に立てられて。添いもえ遂げぬ語らいならば、なまじ約束せぬのがましよ。言えば半蔵は打ち喜びて、あれは竜王大権現。八幡菩薩もご照覽

給え、遣う言葉に偽りあらば。半蔵一命差し上げましよと、神に誓いし心の誠。見えてお為もにっここと笑い、締めて返えせし手と手の裏に。こもる互いの思も通い、この日別れてお為は帰り。半蔵そのままお山に登る、お山登りで氏神様に。日頃焦がるお為に出会い、会うて互いに言葉を交わし。交わす言葉に真実こめて、積もる思いは高嶺の雪と。溶けて嬉しい心の願い、これもあなたのご利益なれば。二人約束した日をちようど、年に一度の初ご縁日。お礼参りはまた重ねてと、暫しぬかづき心の祈願。述べてお拜みてわが家に帰る、半蔵それより柏江通い。三月四月は忍んで通う、忍ぶ恋路にや難所がござる。義理のしがらみ人目の関所、関所ある目の許さぬものは。恋の闇路に身を紛らして、うわべ世間を忍ぶとすれど。忍び行くほど浮名が立ちて、へそれ阿漕ヶ浦に打つ網も。へ一度が二度に重なりて、へ度重なれば現われる。宵に吹く風朝出す嵐、広い堅田を早や吹き回す。どこの地下でも三人寄れば、茶飲み話も半蔵とお為。在や浦辺や町角までも、流行る小唄も半蔵とお為。半蔵両親それとは知らず、隣近所の爺婆達の。いつも小声でささやくことを、世間話のただ他所事と。仇に過ごした身の恥ずかしや、聞けばわが子

の半蔵のことか。知った両親打ち驚きて、わが子半蔵に意見をせんと。奥の一間に半蔵を呼んで、半蔵よう聞け大事なことよ。そなた大事な身を持ちながら、いつの頃から心が迷い。人目忍んで柏江村の、渡りばしなる修験の許の。あれが娘のお為を慕い、末は夫婦となる約束を。堅く結んで通やるそうな、家の跡目を継がせるそなた。そなた心に叶うた娘、入れて夫婦にしてやりたいは。親の心は山々なれど、家が大事か女子が主か。由緒正しいわが家の系図、やがて二代の玄了様と。人に立てられ世に敬まわれ、家を継ぐべきそなたでないか。広い世間の例を見るに、どここの里でも貰うた嫁の。心一つで一家が栄え、心一つで一家が亡ぶ。みめや器量に迷うた人の、家を治めた話は聞かぬ。殊にあの娘は修験の娘、医者と山伏や不吉なものとよ。添うに添われぬ悲縁なれば、この道理をよく聞き分けて。家の大事とわが身の大事、親の心を安めるために。どうぞお為と別れてたもりや、そなた一生添わせる妻と。兼ねて見立てて定めしものは、離の鳥越おは様方の。末の娘におしげというて、今年十月は引き越す筈よ。あれ仲よう夫婦になりて、家の栄えを図りてたもりや。割りつ口説きつ涙を流し、慈悲も情もこめたる母が。事を分けた

る親身の意見、聞いて半蔵は胸とどろかせ。何と答えん言葉は絶えて、腹に据えたるわが身の覚悟。好かぬおしげと夫婦になつて、胸の干把の火を焚くよりも。お為慕いて死んだがましと、思い定めてわが身を定め。死ぬる覚悟を決めたる上は、またと会われぬ此の世の親に。嫌な言葉を聞かしようよりも、安堵さすのが今はの孝と。母に向かいて両手をつかえ、申しこれいな母上様よ。事を分けたる親身の意見、厚きご慈悲の光をうけて。胸の迷いの雲晴れました、父母の仰せに従いまして。直にお為と手を切りましょうと、述ぶる半蔵の心の中は。今宵一夜がわが身の限り、口の先よりその気休めと。母はそうとも夢さらず知らず、半蔵良い子ようあきらめた。幼な時から利巧なものと、人も賞めたる甲斐あるほどに。家の大事を心にかけて、あれな女に未練もかげず。それでわが家の跡取り息子、父もさぞかし喜びましょと。誉めて母様一間を出でる、あとで半蔵は腕こまぬきて。炎暗き火影に向かい、独りつくづくわが身の果てと。味気なき世を心にかこち、死ぬと覚悟を決めたる上は。今宵一夜もうるさき婆婆に、住みてかいなき身の上なれど。息のあるうち一度は逢うて、仔細聞かせにや恨むであろう。恨むお為に得心させて、死んで行

くこそ男の誠。そこで半蔵はわが家を出でて、指して行くのが柏江村の。通いなれたるお為の許よ、格子窓から透かして見れば。皆揃うて夜なべをなさる、お為一人は物思いげに。

手木にもなれて思案の様子、お為お為と小声で呼べは。小首かしげて不審の顔で、誰かどなたか半蔵さんか。いつも早いが今宵は遅い、見ればお顔の色さえ冴えぬ。何か子細のありそなことよ、わけを聞かして半蔵様と。言えは半蔵が吐息を吐いて、胸に打ち来る動悸を押さえ。常に冴えたるその声さえも、沈み勝ちにてお為に向かい。月に叢雲花には嵐、障りあるが浮世の常か。わしとお前の二人の仲は、世にも人にも知らざるものと。包む甲斐無く仇名が洩れて、親の折檻一家の騒ぎ。生きてこの世に居られぬ半蔵、死ぬと覚悟をきわめしものの。せめて一度はお前に逢うて、永の暇の別れを告げよと。わが家抜け出て今来た私、わしは冥土に旅立つほどに。お前や後まで生き長らえて、人に優れた良い婿迎え。夫婦仲良く暮らしたもりや、一つ木陰に立ち寄るさえも。同じ流れを汲みてでさえも、深い縁の有るとぞ聞くに。遂げぬ妹背も五月六月、通い馴れたる好みの甲斐に。思い出す日を忌日と定め、茶湯茶水のご回向頼む。言えはお為がせき来る胸に、

泣く音立てて袖噛みしめる。堪えぬ思いに身を震わせつ、何の答えも唯泣きじゃくり。しゃくり上げたる涙の雨に、よく袂で顔押し拭い。余り無体な半蔵様よ、今の言葉はあざ水臭い。わしと貴方がこうなる初め、神に誓いし互いの誠。遂げて二世まで夫婦になると、言うた言葉を忘れてかいな。生きてこの世で添われぬならば、共に死のとは兼ねての覚悟。

起請誓紙の百枚よりも、言うた言葉をわしや反故にせぬ。貴方死ぬのを外から眺め、後に残りに婿取るような。そんなお為と想うてかいな、二世も三世もその先までも。添うて変らぬ一人の夫と、思う貴方を世に先立たせ。唯の一日も何長らよう、貴方冥土の旅立つならば。わしも黄泉路よみじのお供をしましよ、言えは半蔵打ち喜びて。暫し涙に袂を絞り、されば死ぬ日を決めねばならぬ。死ぬるその日は六月十日、堅く誓うて半蔵は帰る。ひにち経つのは間も無いものよ、今日はその日の六月十日。お為朝から髪解き直し、化粧済ませて晴れ着に着替え。父と母とに両手をついて、申しきれいな両親様よ。私や波越なみこの観音様へ、兼ねてこめたる願いがあれば。今日はこれから参詣します、言えは両親言葉を揃え。そなた波越へ参るはよいが、土用半ばの炎天なれば。傘をさしても日中は

暑い、暑い日中じゃ木陰に休み。咽喉が乾くも冷水飲むな、水を飲む時薬をやろと。出して与える富山の氣付け、お為両手に押し載いて。胸に咳き来る涙を押さえ、今日一日が最後の別れ。明日はこの世に亡きわが子とも、知らぬ真の父上様の。深く情けのそのみ心に、背く不幸は因果か業か。今宵山路の草葉の露と、消えし知らせを聞かしやるならば。さぞやお恨みなさるであろう、思い回せば空恐ろしく。膝も震えて暫しの間、立ちも得去らずその座に居たが。お為ようよう氣を取り直し、それじゃ父上参りて来ます。言うてお為はわが家を出でる、長き日足も早や傾きて。とこうするうちその日は暮れる、そこで半蔵はわが家にありて。今宵限りの身の上げなれば、後に一筆書き置きせんと。部屋に籠りて机に向かい、硯引き寄せ墨磨り流し。鹿の巻筆墨含ませて、筆の初めに記せしことじゃ。二十二才を一期となして、親に先立つ不幸の詫を。次に記せしその文言は、受けしご恩は千尋の海も。須弥の高嶺も及ばぬものを、露や塵ほど報いぬ上に。勝手氣儘な最後を閉じる、不幸いや増す不埒の詫を。次へ次へと身の非を責めて、父母に詫するその書き置きを。書いて封じて手箱に納め、葛籠開きて衣裳を出す。半蔵その日の死に装束は、

膚に白無垢白地の下着。上に越後の白帷子を、着けて締めたる博多の帯に。袂印籠も白金黄金、やがて仕度は皆整えは。銚子盃袂に入れて、家に伝わる来国俊の。一刀手挟み鉄砲提げて、馴れしわが家を忍びて出ずる。急ぎゃ程無く柏江村の、勝手知ったるお為が許よ。格子窓から覗いて見れば、独りお為が唯しよんぼりと。目には涙の物案じ顔、お為お為と小声で呼べば。お為駆け出て半蔵にすがり、お出遅しとわしや待ち兼ねた。此処で人目にかかりましたら、どんな障りも出来よも知らぬ。尽きぬ話は行たその先と、二人連れ立ち家路を離れ。行く手急げばはかどる道の、後を埋むる川瀨さえも。消え行く身のつい終の友、岸を伝うて江頭来れば。今宵十日の若月さえも、西の尾の上に早や傾いて。暗さも暗し後田の、こちを通れば思い出す。過ぎし五月の田植えの頃は、村の娘子皆打ち連れて。茜の襷も派手やかに、菅の小笠の一揃い。緑の早苗かかえ帯、誰を思いか緋腰の雫。濡れて植えたるこの稲さえも、秋は稔りて穂をかざし。末は世に出てままとなる、同じ月日の下に住む。わしとお前はなせ儘ならぬ、野立ちも出来ぬしいら穂の。稔りもせいで果てるかと、言えば半蔵も声湿らして。お為悔むな皆仇事よ、何を悔んで鳴く時鳥。

鳴いて飛び行く声聞けお為、死出の山路や冥土の旅の。その道教えて鳴くよじゃないか、死出の田長が冥土の旅の。その道教えて先に立つ、声を枝折りのあの山こそは。人の名に呼ぶ城山峠、今宵二人は死山峠。さあさ急ごと気を励まして、山の峠に二人は登り。へ城山峠の北側のへ繁りた松のその下で此処が良からうと柴折り敷いて、銚子盃早や取り出だし。半蔵傾けお為に回し、お為飲んでは半蔵に返えし。暫し名残りの酒汲み交す、これが此の世の限り思や。さすがお為は女子のもろさ、涙押さえて半蔵に向かい。へこうなることがあらうとて、へ正月二日の初夢に。へわしの挿したる髪挿の、へすらりと抜けてそなさんの。へ肋に立ちたる夢を見た、へ夢か浮世か浮世か夢か。へ早く覚めたや無明の眠り、へ頼むは後生の弥陀浄土。へ短い夏の夜は更けて、そこでお為がせき立てます。早く死なねば追手がかかる、言えは半蔵が申せしことよ。お為急ぐなまだ夜は長い、明けりやお寺のまた鐘が鳴る。へ今鳴る鐘は柏江の、へ柏江お寺の江国寺。又鳴る鐘は夕月の、へ夕月お寺の真正寺。へまた鳴る鐘は城村の、へ城村お寺の天徳寺。へまた鳴る鐘は佐土原の、へ佐土原お寺の正明寺。また鳴る鐘はご城下の、ご城下お寺の養賢寺。

へ町の五ヶ所が打ち鳴らす、へ東が白む横雲の。へ夜明け鳥が最後をせがむ、そこでお為が申せしことよ。殺し下んせ半蔵様よ、早く死なねば追手がかかる。追手がかかればはずかしくござる、言えは半蔵が申せしことよ。水の垂るよなお前の身体、何処に刃が当てらりよものか。言えはお為が申せしことよ、貴方男で卑怯な人よ。貴方妻じゃと思えば刺せぬ親の敵と思うて斬りやれ。言えは半蔵が覚悟を決めて、二尺一寸すらりと抜いて。花のお為をたゞ一撃ちに、死んだお為に腰打ち掛けて。へ火縄に火をつけて火挟みの、どんというたがこの世の別れ。光も高き行灯す明りの消え行く如く。とろりとろりと成仏なさる、残る哀れは堅田の谷よ。今も残れる比翼の塚に、お為半蔵が心中の口説。聞くも涙の滴り満ちる、絶えぬ手向けの香と華。

(4) 白滝口説

橋の始まり日向の国の、天の掛け橋神代の初め。島の始まり淡路の島よ、神の始まり鹿島の神よ。寺の始まり橋の寺、これは上方都のことよ。都大内公卿大納言、父は横萩豊成卿よ。へそれ豊成卿の奥方に、へいわね御前と申する方の。中にできたが中将姫よ、中将生長は致しはずれど。哀れなるか

や母上様は、中将四つに相成る頃に。僅ばかりの病がもとで、遂にこの世を過ぎ去り給う。そこで豊成思ひしことに、後妻入れるはいかがしけれど。後妻入れねばこの幼な児の、育ち難なき不憫な故に。後妻入れたが紫の前、年と月日の経つのも早い。最早一年二年も過ぎて、縁は不思議なものにござる。またも紫懐胎なさる、今度できたもまたお姫様。へそれ白滝姫と名を付けて、へこれを養育致するうちに。そこで紫思ひしことに、姉の中将生い立つなれば。妹白滝為にもならぬ、そこで紫悪心起る。姉の中将捨て子にせんと、ひばる山とは大山故に。ひひや山ん婆虎狼の、棲まん悪魔のすもうい山よ。哀れなる哉中将姫は、七つなる年その春の頃。ひばる山には捨てられ給う、なれど中将運強ければ。ひひや山ん婆虎狼の、すまん悪魔の餌食もならぬ。当麻寺なる上人様に、天狗様からお告げがござる。ひばる山には捨て子があるが、これを救いて養育すれば。末はこの寺為にもなろう、それと聞くより上人様は。お駕籠こしらえ人夫を雇い、数多弟子子を皆引き連れて。ひばる山にはお急ぎなさる、急ぎや程なく麓に着いた。暫し間は休息なさる、さあさこれから尋ねて回る。物の哀れは中将姫よ、来る日来る夜を唯泣き明かす。それを聞く

より上人様は、さても不思議なあの泣き声は。あれは法華經のねんじでござる、これは粗末にできないことじゃ。お駕籠引き寄せ乗せさせ給う、当麻寺にとお急ぎなさる。急ぎや程なくお寺に着いて、寺で養育致させ給う。年と月日の経つのは早い、最早中将十三の春。裏の蓮茎すごいて見れば、九筋まで筋糸がある。それをつないでかせ糸にして、機に巻きあげ織る曼陀羅は。蓮の曼陀羅十三仏を、数多仏を織りつけ給う。寺に何事仏事があれば、床に祭らせ拜ませ給う。永くお寺の宝物となる、父は横秋豊成卿よ。姉は当麻の中将の姫、妹白滝二八の姿。余り白滝器量の好さに、禁裏しらすの婦にとられして。一の后に召し出だされて、それに津の国山田の里に。治左衛門と賢き男、内裏しらすの夫にとられして。ちりをひらいてその日の務め、ある日小坪の御掃除役。一間拾うてまた次の間に、空の恋風吹きまくりして。一の後の白滝姫の、独り丸寝の御寝姿を。一目見るより早恋となる、恋が高じて恋慕の病。務めできねば山田に下る、わが家帰りて養生なさる。親は恋とは夢にも知らぬ、医者よ祝者よと手を尽せども。大社大社に祈誓を掛ける、今の浮世は世が逆様で。壁に耳ある柱が靡く、石が物言う世の中なれば。人は知らぬ

と一口二口、それがお上の耳には入りて。御用じゃ御用じゃ

と治左衛門が御用、そこで治左衛門が思いしことに。御用と
呼ばれりゃ上らにゃならぬ、早く急いでお上に上る。御前上
がりて両手をつかえ、御用いかがと伺いければ。治左衛門と
はそなたのことか、申しこれいなう治左衛門さん。恋に日
本唐天竺も、高い低いもその隔てない。せひに恋路の歌詠ん
だなら、そちにやるぞや山田の里に。言えは治左衛門が打ち
喜んで、違いたがいの御智恵比べ。そこで白滝申することに、
さあさ詠め詠め山田の男。言えは治左衛門が賢いもので、何
と言わんす白滝さんよ。山の谷々出る水見なれ、へ下から上
へは流れまい。へ水も上から下には下る、歌もだんだんはや
りしけれど。歌も上から下には下る、さあさ詠まんせ白滝さ
んよ。言えは白滝理に詰められて、へさて雲谷や雲谷や。へ雲より
高い白滝に、情かけるな山田の男。言えは治左衛門は賢いも
ので、直にその歌返歌で返す。へさていなづきやいなづきや、
へ稲葉の露に恋い焦がれ。お日は照る照る山田は枯れる、こ
れ程山田の枯れるのに。落ちて助けよ白滝の水、愛し可愛い
や白滝姫は。山田せんちよに詠み落とされて、連れて帰るが
山田の里に。

(5) いろは口説

此処でないこれから下の、下じゃ日向の佐土原町の。
ほけつ和尚という上人の、作り置かれしいろはの口説、まず
はいの字を頭に据えて。ろくどよしゅうの大川渡る、早くち
りきのみ船に乗りて。西の浄土に追風おいてで走る、帆掛け船とは
念仏様よ。へんじよなんしの誓いの船よ、とらえ作法もない
悪人の。知恵も力も要るではないぞ、理窟たぐいあるとも皆まで言
うな。ぬしが自力をさらりと止めて、類も類もなき本願に。
思い定めし金剛の心、われが気儘になるものかいな。かえす
がえすもご恩のほどを、余念交えぬその中からも。頼め喜べ
如来のご慈悲、礼儀作法も要るではないか。その身そのか
らてを合わせ、常に念ずる念仏様よ。寝ても覚めてもご恩の
ほどを、何に交えんその中からも。業も無法もまた苦しみも、
無理な世界と思わぬように。憂いも辛さもご縁となりて、命
短し朝顔の花。後と言われん無常の命、終り次第に極楽様よ。
くろうなすぎは貴方が務め、やはりわれ等は迷いの儘よ。招
く心は極楽浄土、けんの地獄に沈まぬうちに。船の迎えに乗
り損うな、心静かに頼んでおかれ。えしん懺悔のふねやくそ
くの、てまえよりしておるではないか。赤の裸で来いとお

告げ、さても尊い如来のお慈悲。聞くにつけても歎喜の涙、
言うに言われぬ如来の命。めいしよなる哉極楽浄土、みめい
音曲楽しみどころ。強てわれ等を極楽境に、縁も頼もない私
を。へ偏に弥陀の計らいで、へ文殊菩薩がともだちなさる。
へ世界に返りてげんこうの、へ直に方便氣儘に濟度。へ一ふ
のしようごんはなふるこう、へ西も東も宝のうえき。へ三十
四相の姿となりて、へ四ま黄金のはだえをきいて。へ五こん
みりよくの音楽聞いて、へ六どよしゅうの迷いを離れ。へ七
ふのせいげん花ふるこう、へ八くどく水みみょうなお池。へ
九どくしょうごん楽しみ尽つし、へ十万億土は命の終り。